

年末号

タブラ

ラサ

# Tabula rasa

(図書館学生新聞) 第8号

## ご挨拶。

読書の秋も終盤になり、一気に冬めいてきました。今回のタブラ・ラサのラインナップは、図サポメンバーによる『図書館戦争』座談会から、紀伊國屋書店さんの協力のもと行われたブックハンティングの瓦版レポートまで、内容豊富となっています。

ブックハンティングには私も参加しましたが、本棚には所狭しと新作名作話題作が並んでいるので目移りしてしまい大変でした。迷う気持ちを抑え、悩みに悩み抜いて私なりに面白い本を選んでみました。

来たる冬季休暇を共に過ごす一冊を図書館で見つけてみてはいかがでしょうか？

日文2年Aクラス浅田梨沙



梅光学院大学図書館学生新聞

『Tabula rasa』 第8号

発行日：2008年12月17日

編集・発行：梅光学院大学図書館サポーター

図書館長 松尾文子

# 図書館戦争 談会

～図書館サポーター-図書館戦争ヲ語る!～

## 『図書館戦争』シリーズ:データ

有川 浩著 徒花スクモイラスト

アスキー・メディアワークス発行 2006-2008

本編『図書館戦争』『図書館内乱』『図書館危機』『図書館革命』(全4巻)

および『別冊図書館戦争』(全2巻)刊行中(2008年12月現在)

## 梅光学院大学図書館所蔵データ

分類:913.6/176-1~4、別1,2

配置場所:2階書庫

## あらすじ

時は2019年、公序良俗を乱す表現を取り締まる「メディア良化法」が施行された社会。

本を不等な検閲から守るため、図書館は「メディア良化法」に立ち向かう唯一の存在として「図書隊」という武装組織を結成し、図書館の自由を守るために立ち向かう!! 主人公、笠原郁は自分を助けてくれた憧れの「王子様」を目標に大好きな本を守るため、図書隊に入隊する。

図書館を舞台に繰り広げられる、戦闘&ラブコメ(ラブ・アンド・コメディ)!!!  
今話題のこの作品…

## 図サポメンバーが熱く語ってみた。

この作品が大好きなメンバー3人が皆さんにオススメします!!!

## 『図書館戦争』との出会い

W: さて、皆さんには『図書館戦争』との出会いについて語っていただきましょう! 私はたぶん、高校時代だったかな? 題名から。「図書館……なのに戦争?」って思いました。欲しいな~ってずっと思ってたら、大学の生協に3冊ドカンと置いてあって、思わず購入! でも、すぐ読まなかったんだ…と言うか時間がなくて、読めなくて。ぶ厚いじゃん、これ!!! その後に、アニメ化が決定して、読まなきゃ! と…学校でも読んでたね。あの分厚い本を持参して。それでみんなに広めちゃいました☆

N：私も気にはしていたんだよね…そしたら、Wが読んでた！  
そういえばアニメもだけど、漫画にもなったよね…

全：これこそメディアミックス!!! (笑)

S：初めは、Wちゃんに漫画を借りました。その後に、別冊を読んで本編を読んだ～。図書館学受講者じゃないから、分からないかと思ったんだけど…ここ重要だよね！

「図書館学を学んでなくても分かります！」(小声)

N：あと、男女問わずに人気だよね！弟も読んでたよ。

W：ライトノベルで読みやすいしね。

### こんな図書館…どこの部署に行きたい？

W：では、図書隊に入るならどこがいい？

N：現実には後方支援で。でも、やっぱりタスクフォース(\*注)は譲れない!!! リベリング(高所からのロープを使っての降下訓練のこと)やりたい!!!

S：やっぱり、タスクフォース！ね～!!! あと稲嶺さん(関東図書基地指令、図書隊の創設者)の付き人。

W：私は普通に図書館員で。運動が苦手だから…あと、高いところも…

S：なんで!!! あんなに「タスクフォースかっこいい!!!」とか「やっぱり、タスクフォースだよね」とか言ってて大好きなのに!!!

N：現実的すぎるよ!!!

\*注:図書館特殊部隊(ライブラリー・タスクフォース):主人公がのちに所属することになる図書館の精鋭部隊。通常図書館業務から大規模制圧戦まで様々な任務を行う。

### 登場人物について

#### ～笠原 郁～

『熱血バカ』。本作品の主人公。身長170cm、運動神経抜群で足が速い。

高校生のとき、自分と本を検閲から救ってくれた図書館員(郁は「王子様」と呼ぶ)に憧れ、親の反対を押し切り図書館員になる。「考える前に行動」というまっすぐな性格の持ち主。

W：さてさて、今度は登場人物について話していきましょう。最初は郁ちゃんです！どんな印象だった？ 私はね～…健気！

N：共感できる。いろんなことにね！

S：まっすぐ！

N：あと、ぶきっちゃだよ。恋愛に関して郁ちゃんはとても乙女(笑)初々しくて、奥手で…なんかもう…読んでるこっちが照れる。

S：恋心に気づいたとき…キャー————!!! ベタ甘だよ。

N：分類が分からないってところがいいよね。図書館員としてはダメダメだけど。

## ～堂上 篤～

『怒れるチビ』。郁の直属の上官。タスクフォース、堂上班班長。まじめで頑固な性格のため郁とたびたび衝突するが…。身長165cmで郁からは「チビ」呼ばわりされることもしばしば。

W：さてさて、男性陣にいきましょうかね。

S：男性陣はすごくしゃべれるね。

N：かっこいいもんね～。

W：少し抑え目で行きましょうね…では、堂上教官！…みんな、テンションおかしいよ！ニヤニヤしすぎだよ！ 自分もだけど…

N：確か堂上教官って身長が165cmだよな…私と1cm差。郁との身長差・5cm！（郁は170cm）萌え!!!

S：多すぎて、止まらない…

W：私は初め、なんだこいつ!!! って思ったんだけどね。あの、自販機の前の…

N：アレね～犯人確保をしたのは、堂上教官なのに報告書上じゃ郁になってて、それを郁が堂上に問い詰めたら「口出しするほど偉いのか!？」って言ったやつ？

W：そうそう…

N：読んでいくうちに、さりげない優しさとかから「キタコレ！」ってなっていた。

W：さてさて、堂上の印象は？

N：責任感が強いし、部下思い。あと、すかさずフォロー！

W：やっぱり、ぶきっちゃだよな…

S・N：そうそう!!!

S：あと、すかさず飛び込んでいっちゃうタイプだね。切り込み隊長！

N：ぼむぼむにキュン！（※堂上が郁の頭を撫でるシーンのこと）

郁が辛いつて言うのを敏感に見分けてくれてたり、そういうやさしいところは、普段が厳しいからギャップもあったりするね。

S：県展の時の電話越しに「ぼん」があ！（※堂上が郁に電話では頭を撫でることはできないので代わりに口で擬音をいうシーンのこと。）

W：本当にいい男揃いだよね～。

S：ああ…ページが足りないよね…

N：さりげなく郁のことを助けてたりするところが良い!! 柴崎が堂上教官のことをイイ男って言うのが分かるよね…

## ～小牧 幹久～

『笑う正論』。堂上の同僚。タスクフォースで堂上班の副班長。

常に正論を貫き、周囲をよく見るタイプの人物。温和な性格でかなりの笑い上戸。

W：さてお次は…小牧！

N：鞠江ちゃん（次を参照）、LOVE…

S：さわやか系。ところがどっこい！ あっ、この辺は読んでみてください。

W：傍観者…と思いきや！ね～。

S：そうそう！サポートタイプだよな～堂上に対して、暖かく見守ってるよ。

N：いいよね～相談役。

## ～中澤鞠江～

小牧の幼馴染。中学生の時に突発性難聴という病気にかかり補聴器なしでは耳が聞こえない。小牧を幼いころから慕っている。

W：お次は話に出てきた、鞠江ちゃんにいきましょうかね。

N：かわいいし、素直。

S：妹みたいな…高校生。あとは…小牧の幼馴染。

W：アニメには出てこなかったんだよね…

N：本当に残念。

## ～柴崎麻子～

『情報屋』。郁の寮でのルームメイトで親友。情報通であり、通常の業務を行う図書館の業務部に所属。かなりの美人。勝気で容赦のない性格。

W：続きましては…柴崎！ 情報通ですね～。

N：友人に欲しいけど…敵に回すところだよな。

S：でもさ…一人だけ郁の味方になるって言ってたし!!!

N：頭がイイし…視野が広い。あと、美人なのに男前。

S：惚れるね…仲良くなるとその人にだけ見せる弱さ…ギャップが!!!

W：郁にだけ弱みを見せるよね…

## ～手塚 光～

『頑な少年』。郁、柴崎と同期でタスクフォースの堂上班に所属。几帳面で努力家。成績はとても優秀。父親が図書館協会会長。堂上を尊敬している。

W：最後に手塚ですね。

S：かわいい…

W：私は初め、嫌いだったんだよね。でも、話を追っていくうちに変わっていったよ！

N：偉そうなヤツだけど…これまた、ぶきっちょ！

W：あとは完璧な存在。郁とよく対比されてるしね。

## 最後に…まとめ!!!

W：さて、まとめに入りましょうかね。あつ今、某所にてカモミールティーを飲んでます。

これを読むと、カモミールティーを飲みたくなるんだよね…

S：その辺のことも、『図書館戦争』を読み進めたらわかります。

N：本編4巻と別冊2巻が図書館にも入っていますので読めますよ。

W：さて、『図書館戦争』の魅力ですが…

N：やっぱり、人間模様かな？

S：そうだね。登場人物のひとりひとりが濃いんだよね～

W：それでは最後に誰か締めてください!!!

N：それでは…私たちがオススメする『図書館戦争』を読んで、またこの座談会を読んでみてください!!!



Book



全ては思い付きから始まったこの企画、まさかの実現 !!! 『ブックハンティング』とは、図書館に入れて欲しい本を、本屋に学生が直接赴いて選ぶというものです。そんな今回の夢の狩場は、博多の紀伊國屋書店様でした。我々を受け入れてくださってありがとうございますっ！



今回参加できなかった学生の皆さんから預かった『おつかい』も遂行してきました。今回の戦利品は、ポップを作ってカウンター前に並べようと思います。ぜひぜひ図書館に足を運んでみてください！

どんな本を狩って・・・失礼しました。買って来たかは、右のリストをご参照ください。

初めての試みということもあり、色々と反省点はありますが、また次も企画していますので、皆様のご期待に沿えるように、今から腕を磨いておきます！

(ブックハンターズ)



Hunting



# 今回の収穫物(抜粋)

書名	著者名
魂のピアニスト	フジコ・ヘミング
東京ナイトメア：薬師寺涼子の怪奇事件簿	田中芳樹
アニメと思春期のころ	西村則昭
ブルーもしくはブルー	山本文緒
スイッチを押すとき/8.1.Game land/8.1.Horror land	山田悠介
特攻回天戦：回天特攻隊隊長の回想	小灘利春：片岡紀明
知覧からの手紙	水口文乃
幸福は永遠に女だけのものだ / 太陽王と月の王 (他)	澁澤龍彦
源泉の感情：対談集 / 英霊の聲：オリジナル版	三島由紀夫
さよならを言うまえに：人生のことば 292 章	太宰治
メシアンによるラヴェル楽曲分析	メシアン & ロリオ
知ることより考えること	池田晶子
本格推理委員会	日向まさみち
孤宿の人	宮部みゆき
気をつけ、礼。	重松清
サキサキ：オノマトペの短歌	穂村弘：高島那生
いま、会いにゆきます / そのときは彼によろしく	市川拓司
ポーの話	いしいしんじ
現代若者方言詩集：けっぱれ、ちゅら日本語	浜本純逸
都市：ローマ人はどのように都市をつくったか	マコーレイ
日本文学ふいんき語り	麻野一哉：飯田和敏
星座の神話がわかる本	藤井旭
フェルメール全点踏破の旅	朽木ゆり子
RDGレッドデータガール：はじめてのお使い	荻原規子
これからを面白くしそうな31人に会いに行った。	近藤 & 米田
アシュリー	アシュリー・ヘギ
からくりからくさ	梨木香歩
炭坑節物語：歌いつぐヤマの歴史と人情	深町純亮
流星の絆	東野圭吾
世界一たのしい論理思考のレッスン： エリカとギギの不思議な冒険	小野田博一

特別ゲストコーナー!!!「映画」って映像の文学だよな?・・・これは我々図書サポとニコラス和田で、文学と映画の奇跡の架け橋になれるのでは?!の、新企画!!!

# CINE・JUN!

～俺たちスーパー映画ファン!!～



## ニコラス和田

とある切欠から、我々図書館サポーターが知り合った「映画」を語る熱い男。映画と文学をこよなく愛す、とってもいい人。

映画が人類の文化として成立して何年ほど経っただろうか。記録では人類最古の「映画のような」ものは、1895年にフランス人のリュミエール兄弟が自らが開発した装置を用いて製作した「駅のプラットフォームに汽車がやってくるのを収録した作品」であるらしい。実に現在の2008年から113年前、我々の曾祖父が恐らく生まれたか生まれてないかといった時代である。約100年の間で「映画」は文学、絵画、音楽などの古来から存在する「芸術」の仲間入りを果たし、一時は「娯楽の王」となり得たこともあった。約100年という他の芸術に比べて浅い歴史ではあるが、その密度は他の追従を許さない。

その100年という短い歴史の間に何万、いや何億という人間が映画の感動に救われ、生かされてきたであろうか。その数は計り知れない。万人が感動した一般に名作、傑作と称される映画に救われた人もいただろう。映画史の中に埋もれてしまうような他愛の無い映画に救われた人もいただろう。

だが勘違いして欲しくないのはここで私の言う感動とは「感傷や同情」から来る感動ではない。感動とは映画を観た上でその人に生じた感情を指すものであり、一般的にプラスのイメージである希望や歓喜、興奮はもちろんのこと、マイナスのイメージである憎悪や嫌悪、恐怖などの感情も立派な感動である。例えば『ドッグデイズ』(2001年・オーストリア)のような映画を観れば人間に対しての嫌悪と憎悪しか沸かないだろうし、『素晴らしき哉、人生!』(1946年・アメリカ)を観れば人



間と人生に対して溢れんばかりの希望と歓喜が沸くであろう。映画においては希望も歓喜も興奮も憎悪も嫌悪も恐怖も等しく感動であり、例に挙げた『ドッグデイズ』も『素晴らしき哉、人生！』も、そういう意味では二作とも等しく『感動作』であるのだ。

そういう意味では現在の邦画界の惨状は目を覆うばかりである。試しに近くのシネコンに行って公開されている邦画の内容をチェックしてみると良い。そこにあるの感動は恐らく「感傷と同情」の感動ばかりだろう。近年公開された『恋空』（2007年・日本）などはその最たる例であると言える。別に「感傷と同情」の感動が悪いと言うつもりも無いし、『恋空』を悪者にするつもりも無い。ただ私が主張したいのは「感傷と同情」の感動以外の選択肢も観客に与えて欲しいということだ。まったく他の選択肢が無いというわけではないが、今の邦画界には「感傷と同情」の感動以外の選択肢が少なすぎるように感じる。そんな中での『スキヤキウエスタン・ジャンゴ』（2007・日本）などの公開は嬉しい限りである。

しかし散々偉そうな事を言っておきながらも、私は映画の事を「所詮は見世物小屋の延長物」だと思っている。人は非日常的な刺激を求めて映画館に足を運ぶのだ。夢のような恋愛物語、血液が沸騰するほどのアクション、ショック死しそうになるほどの恐怖、希望の無い退屈な日常の中に信じられない「映画体験」を求めて我々は映画館に足を運ぶのである。例えば去年クエンティン・タランティーノとロバート・ロドリゲス両監督による企画映画『グラインドハウス』（2007年・アメリカ）によって再度注目され始めた「グラインドハウス」に集まった客を見ればわかるであろう。彼らの多くは移民の日雇労働者やホームレス、ゴロツキや不良達である。社会から爪弾き者にされた者たちが最後の希望として、映画の持っている非日常的なパワーを求めたことは想像に難しくないのではないだろうか。現に「グラインドハウス」で上映された映画の多くは、現在ハリウッドを我が物顔で歩いている映画作家も裸足で逃げ出すほどの衝撃的なパワーに溢れた作品ばかりであった。制作者の観客を楽しませる「見世物小屋精神」を忘れた時に映画は輝きを失うのだ。

最後に私の映画像を最も端的に表している太宰治の言葉で一回目を締めくくろう。

「私は、映画を、ばかにしているのかも知れない。芸術だとは思っていない。おしるこだと思っている。けれども人は、芸術よりも、おしるこに感謝したい時がある。そんな時は、ずいぶん多い」

# はじめまして！

新たに入部した王妮(オウニ・中国語の発音はワンニ)と申します。よろしくお願いします！  
中国の青島大学から、交換留学生として、喜んで梅光学院大学に来ました。

サポーターの仲間になってくれて、本当にありがとうございました。青島大学で図書館の仕事もしていました。ここにいる一年間、皆さんと一緒に頑張りたいと思っています！  
よろしくお願いします~~~~す！

これから、ちょっと青島大学日本語学部資料室のことについて、皆さんに紹介したいです！

まず、青島大学四階建ての図書館はこちらです~~

二階に日本語学部専用の閲覧室があります。日本語国語辞典から近代小説、絵本までいろいろな本があります。

近代小説は吉本ばなな、江國香織など日本で人気ある作家の本は結構あります。



- ・資料室の入り口です。資料室は私たちの教室のすぐ隣にあって、皆放課後ここに行って本を読みます。
- ・ドアに日本の地図を貼っています



- ・資料室は図書館の閲覧室と違って、漫画と雑誌もあります。
- ・狭いけれど、皆が好きな漫画とファッション、料理の雑誌がいっぱい並んでいます。
- ・放課後、学生たちは資料室に集まって、好きな漫画を一緒に読みます！



- ・私のお勧め本
- ・ここに貼っているのは私たちがすごく好きな本の紹介と皆さんにお勧めしたい理由です。
- ・いっぱい貼っていますね～

・資料室の  
石川先生！

- ・先生がいるから、資料室はいつもにぎやかです。
- ・皆が先生から勧められた本を読んだり、先生と話したりして、いろいろ勉強になります。

# 第二回読書家大賞★受賞者決定！！

「たくさんのご応募ありがとうございました」

## 読書家大賞

PN・**設楽柚希さん**（日本文学科2年）

## 準大賞

1等賞\***高尾実咲希さん**（日本文学科2年）

2等賞\*PN・**キサトさん**（日本文学科4年）

3等賞\***常田瑛子さん**（日本文学科4年）

## ナイスコメント賞

PN・**Excel 勝也さん**（日本文学科1年）

PN・**健正さん**（日本文学科3年）

**片山朋子さん**（英米文学科1年）

☆賞品として以下が授与されました☆

## 大賞

図書券 10,000 円

## 準大賞

1等賞\*図書券 5,000 円

2等賞\*図書券 3,000 円

3等賞\*図書券 1,000 円

## ナイスコメント賞

図書券 3,000 円

\*「読書家大賞」は梅光学院大学父母会課外活動等奨学金より、  
図書館サポーターが頂いたお金で運営致しております。父母会のご厚意に、心から感謝致します。

図書館カウンター近くのテーブルに応募用紙を用意しています

第三回読書家大賞募集中！

## 編集後記

なぜ、我々はこうもチームワークが絶妙に噛み合ったり、噛み合わなかったりするのか…。個性的なメンバーと3年間編集作業を続けてきましたが、たとえ足並み揃ってなくても、楽しい時間でした。この号を最後に三年生は一応引退となります。

次回からは、また新たな編集チームが生まれ、本誌も生まれ変わるかもしれません。

ここまで読んでくださってありがとうございます。

